

3. 2022年度学会参加報告

第41回日本糖質学会年会参加報告

伊藤 和義

日本糖質学会 (The Japanese Society of Carbohydrate Research; JSCR) は糖質の総合的科学的に関する基礎、ならびに応用研究の発展向上を図り、糖質研究者および技術者の相互連携と交流を深め、文化の向上に寄与することを目的とした団体である。日本糖質学会年会は、糖質に関連する化学、生物学系の研究者および学生が一堂に会し、糖質科学の最新の研究成果を発表し、議論する場である。毎年夏ごろに全国各地を候補地として開催しており、糖質科学の分野では国内最大規模の伝統のある年会である。

2022年9月29日から10月1日にかけて、第41回日本糖質学会年会が大阪大学コンベンションセンター・保健学科講義棟（共催：大阪大学医学研究科など）で開催された。大阪で年会が開催されるのは2013年の第32回日本糖質学会年会以来（代表世話人：大阪大学理学研究科 深瀬浩一先生）であり、通算6度目となった。今回の世話人会代表は大阪大学大学院医学系研究科の三善英知先生で、次世代の糖鎖研究を切り拓けるような会にしたいとの意向から、「糖鎖研究の新しい潮流と未来」というテーマが掲げられた。発表演題数は253題で、参加人数は533人であった。前年、鹿児島大学で行われた第40回日本糖質学会年会は、対面とオンラインを併用したハイブリッド開催であったが、今回は講演・ポスターなどすべての発表が対面のみで行われた。しかし、依然としてコロナ渦であったため、懇親会は開催されなかった。

初日の午前中には、「優秀講演賞第2次審査」が行われ、5名の若手研究者が発表を行った。受賞者は次回の年会で表彰される予定である。ワークショップは初日と2日目に計4回行われたが、2日目に行われたワークショップ3「プロテオスタシスの理解と革新的医療の創出」の研究発表がどれも非常に面白い内容だった。特別講演では、大阪大学統括理事の金田安史先生が「基礎研究から産学連携へ、そして社会を創る」というテーマでご講演された。また、大阪大学の忽那賢志先生が「COVID19の現状とコロナ時代の感染対策」というテーマでご講演された。ランチョンセミナー & イブニングセミナーは計4回行われたが、2日目に行われたイブニングセミナーが特に印象的だった。星薬科大学・東北大学大学院薬学研究科 教授の眞鍋史乃先生が「Fc γ RIIIa アフィニティークロマトグラフィーによる非対称型糖鎖均一抗体の作製」というテーマご講演され、より良い抗体医薬品をつくるための革新的な技術についてご発表された。コロナ渦以降初めて対面で参加した年会だったが、対面開催ならではの学生や若手研究者による活発なポスター発表やベテラン研究者による貴重な講演を聴くことができ、とても感銘を受けた。

次回の年会は2023年9月7日～9日に鳥取県鳥取市（とりぎん文化会館）で開催される予定で、世話人代表は鳥取大学の田村純一先生である。また、エクスカッションや懇親会も予定されている。次回はどんな面白い研究発表が聴けるか非常に楽しみである。